# エチオピアの森林コーヒー保全への取組み

## SCAJ2019 への出展

エチオピア南西部の高地はアラビカコーヒー発祥の森と呼ばれ、豊かな森林生態系が残っている。この森に暮らす人々は自生するコーヒー（森林コーヒー）を伝統的に利用しており、果実を採集してコーヒーにして飲み、またそれを売って生活の糧にしてきた。国際耕種が従事しているエチオピア国ベレテ・ゲラ森林で実施中の JICA 技術協力プロジェクトでは、この原種の森を守りつつ持続的に活用できる仕組み作りを目指している。

エチオピアは世界第 6 位のコーヒー生産国であり、アラビカコーヒーの輸出は主要な外貨収入源である。政府としては、さらに輸出量を増やすために、品質の良いコーヒーの栽培を奨励している。しかし、こうした政策の影響もあり、近年、コーヒーの収量増加を目的とした改良品種の導入や栽培地拡大が、森林コーヒー栽培地で顕著になっている。これまでプロジェクトでは、主に森林保全を担う政府機関をカウンターパートとして活動してきたが、あまり馴染みのなかったコーヒーの輸出やマーケティングに携わる政府・民間の関係者と協議すると、「森林コーヒーは生産量が少ないから、化学肥料を施肥するか、改良種に植え替えるべきだ」「森林コーヒーは現地の住民が飲むもので、輸出できる品質にはならない」といった認識が多く、このアラビカコーヒー原種の森というエチオピアにしかない貴重さ、また、技術協力によって森林コーヒーが日本へ輸出できる品質に至っていることが、エチオピア国内でも十分に認知されていないことに驚かされた。

そこで、今年 3 月にアジスアベバで、シンポジウム「世界への贈り物としてのエチオピア野生コーヒー」を開催した。コーヒーに関連する政府機関や民間企業などから百名を超える参加者が集まり、森林コーヒーの状況を共有すると共に、さらに価値を高めていくための可能性や課題を協議した。続けて、9 月 に東京ビックサイトで 開催されたワールドスペシャルティコーヒーカンファレンスアンドエキシビジョン（SCAJ2019）に出展し、日本での森林コーヒーの販路拡大に加え、参加するエチオピア関係者にその価値を認識してもらうことをねらいとした。

駐日エチオピア大使とコーヒー輸出業者たち

展示ブースでは、エチオピアコーヒー輸出協会の下で来日したコーヒー業者と共に、様々な産地からのコーヒーの紹介に加え、森林コーヒーの試飲を提供した。国際耕種からも数名の社員がブース運営に参加し、SCAJ イベントの盛況ぶりに圧倒された。3 日間で実に多くの来訪者があり、実際に森林コーヒーの取引に関心を持ち、価格や出荷量など詳しく訪ねてくれる方も複数いた。

加えて、「エチオピアコーヒーの魅力」「エチオピア森林コーヒーのスペシャルティへの取組み」と題する 2 つのセミナーを実施し、JICA による取組みの経験や成果の他、エチオピア側からもコーヒー庁総裁やコーヒー輸出協会会長が発表を行った。どちらも立ち見が出るほど多くの方に来場頂き、エチオピアと森林コーヒーへの関心を高めてもらう手ごたえを得ることができた。また、エチオピアの来訪者からも「森林コーヒーが価値あるものだとわかった…」という声があり、今後、アラビカコーヒー発祥の森を守りつつ、森林コーヒーを普及していくための共通認識と関係強化につなげられたと感じている。

森林コーヒーの試飲やカッピングも実施